

天国は待ってくれる

2007(平成19)年2月24日鑑賞(梅田ピカデリー)



監督=土岐善将/原作=岡田恵和『天国は待ってくれる』(幻冬舎刊)/出演=井ノ原快彦/岡本綾/清木場俊介/石黒賢/戸田恵梨香/中村育二/佐々木勝彦/蟹江敬三/いしだあゆみ(ギャガ・コミュニケーションズ、松竹配給/2007年日本映画/105分)

第2章

禁じられるほど燃え上がる?

……モノは言いようで、三角関係か聖三角形かは微妙なところ……。ちなみに舞台も、築地市場、朝日新聞社、銀座という聖三角形……。3人の主人公を含め、善人ばかりが登場し、そんなバカなどと思うような偶然が連続する中、狙いどおりのラストシーンに至るのだが、そんな絵空事で人は感動するの……。もうちょっと骨太の作品を期待したいが……。

聖三角形がキーワード……

漢字力や読解力そしてトータルとしての国語力の低下が懸念されている今の日本では、中学生が正三角形のことを平気で聖三角形と書くかもしれない……。しかし、もちろん聖三角形などという概念は存在しないもの……。ところがこの映画では、人間関係においても、位置関係においても聖三角形がキーワード。まず人間関係におけるそれは、上野武志(清木場俊介)と西岡宏樹(井ノ原快彦)そして中野薫(岡本綾)の小学生時代から今日までずっと続いている3人の絆を指すもの。そして、位置関係における聖三角形とは、武志が働いている築地市場、宏樹が勤めている朝日新聞社、そして薫が勤めている銀座、といっても銀座のお姉さんではなく文鳩堂という文具店……。

なぜ、ボーカリストを主人公に……?

最近では、俳優と歌手との境界がどんどんあいまいになり、相互乗り入れが進んでいる……。しかし、この映画に登場する2人の男性主人公は、なぜか有名

な若手ボーカリスト……。すなわち、井ノ原快彦はV6のメンバーで、映画はこれが初の単独主演。そして清木場俊介はEXILEのボーカルSHUNとしてデビューし、2005年には「清木場俊介」名義でソロデビューを果たし、本作で映画初出演となったもの。

私は別に歌手を映画に起用すること自体に反対ではないが、もしも人気ボーカリストを配置することによって観客を呼ぼうとしたのなら、それは大きなまちがいで。劇団四季のように、やはり地道に1つ1つの作品で俳優を育てていかなければ……。

聖三角形それとも三角関係……？

この映画ではじめて聞いた聖三角形は美しい言葉だが、男2人に女1人の関係は普通三角関係といって、昔からもめる原因とされている。したがって、私のように斜めからモノを見る習慣のある男から見ると、小学生の時から聖三角形がいつまでも続くもんか！ とつい思ってしまう。3人がずっと幼なじみのお友達というだけで、男女間の気持が一切入ってこなければ話は別だが、それには薫がよほどブスであることが条件……？

ところが、この映画では、まず武志が薫にプロポーズしたから、その時宏樹と薫はその対応に困ったはず……？ さらに、武志が交通事故にあって植物状態になり3年間経つと、武志の家族も「もういいよ」と言いながら、宏樹に対して薫にプロポーズするよう勧め、宏樹もそれを決行。ところが、その結婚式の日、奇蹟のように武志が意識を取り戻したから、さあ大変。もちろん、映画はつくりモノだからそんなストーリーができるのだが、こんな状況が続く中、三角関係ではなく、聖三角形が最後まで続いていくというのは、あまりにキレイごとすぎるのでは……？

親たちも「準」聖三角形……？

この映画では、宏樹、武志、薫の3人が仲良しなら、その親の世代もみんな仲良し。そのたまり場は、薫の父昌二（佐々木勝彦）、母春子（いしだあゆみ）が経営している喫茶「春」。春子は若い頃「築地のマドンナ」だったし、今でも喫

茶店の「看板娘」だが、どうも宏樹の父忠夫（中村育二）はこのマドンナに求婚し損ねたよう……？ つまり、宏樹と薫の親の世代も、聖三角形かそれとも三角関係かという確執（？）があったよう……？

他方、築地市場のマグロ店「布長」の頭領、上野耕助（蟹江敬三）は、一本気で人情に厚い築地っ子だが、彼は武志の叔父。つまり、武志は幼い頃両親を事故で亡くして以来、叔父さんに育てられてきたわけだ。そして耕助の娘で、武志のいところになるのが美奈子（戸田恵梨香）。聖三角形の3人をいつもすぐ近くで観察し、女の気持を全然理解しない宏樹と武志を見かねて薫にアドバイスできるのがこの美奈子……？ こう見ると、親たちも準聖三角形の関係といえるが、これもあまり現実には存在しない絵空事……？ またそれ以上に鼻につくのは、この映画の登場人物はいい人ばかりで、悪人が1人もいないこと……。

薫の主体性は……？

今ドキの若いアベックを見ていると、大体イニシアチブをとっているのは女の方。バブルの頃は、アッシー君とか貢ぐ君とかと言われていたが、今そういう言葉が死語になったのは、むしろそれが当たり前になっているから……？ このように少なくとも、同じ年齢であれば女の方がしっかりしているのが常識。ところがこの聖三角形の場合は、武志が1番ガキ大将風だから、気の弱い宏樹はそれに引きずられるし、そうなるど薫も当然同じ方向に、という傾向が強い。まあ、小学生の時から社会人になった今まで、ずっとそんな力関係で聖三角形を維持しているから、それはそれでいいのだが、こと結婚となれば話は別……。

私は当然そう思うのだが、この原作と脚本を書いた岡田恵和はここでも薫に主体性を発揮させず、流れに身を委ねる女として描いている。武志自身が、薫は本当は宏樹が好きなのではないかと思っているのだから、結婚という女の人生の一大事くらい、薫は自分の意思をはっきり表明してもよかったのでは……？ 最初からそうだから、その後の展開でも薫は受け身で、終始尽くす女……？

この映画のポイントは……？

交通事故の事件を数多く処理している弁護士の私の目から観ても、この映画は

絵空事が多すぎる。それは交通事故によって植物状態になった武志が、宏樹と薫の結婚式の日に突然覚醒したり、そこから急激な回復力を示して1カ月の間に車椅子ながらあまり不自由なく生活したり、自由にしゃべったり、そして今度は、宏樹と薫の結婚を見届けると突然息を引き取ったりと、あまりにも都合よく病状が変遷するところ……。もちろん、映画では何でもありだろうが、それはあんまりでは……？

しかして、この映画のポイントは、死の淵から奇蹟的に甦り、1カ月の間に宏樹と薫の幸せな結婚式を見届けた武志は、また天国に召されていきましたとサ、ということ。逆に言うと、西田敏行と伊東美咲が主演した『椿山課長の七日間』(06年)のように、武志はどうしても残された2人を幸せにしなければという思いで1カ月間だけ天国からこの世に戻り、その任務を果たした後また天国へ戻っていったということをアピールしたかったわけだ。しかし、それなら『椿山課長の七日間』のように、思いっきり喜劇風にした方がむしろ感動的……？

大きく分かれる4人の評価と総合点は……？

『キネマ旬報』3月上旬号の「REVIEW 2007 Part 1」は、『天国は待ってくれる』について、4人の評論家が採点しているが、それは4点、2点、1点、1点と評価が大きく分かれているうえ、トータル点も低い。そして、1点をつけた評論家の意見はほぼ私と同じで、1人は「礼儀正しく清潔な友情を保つ3人の精神は人工的で幼稚」、もう1人は「1人たりとも“悪人”が存在せず、“善人”ばかりからなるユートピアに対する拒否感」ということ。もっとも、4点をつけた評論家は、三者関係、周囲の大人たち、丹念に計算された画面等すべてについて絶賛しているが、さてあなたの評価は……？

2007(平成19)年2月28日記